男　女　共　修
── 新しい家庭科のスタートにむけて ──

分　校　淑　子

序

学習指導要領の改訂に伴い、高等学校家庭科は5年後より男女必修となる。この平成6年度をもって、家庭科は本当の意味でスタートすると考えたい。

女子のみ必修から男女必修に変わった最大の要因は、「女子差別撤廃条約」の批准にあるといえよう。この条約は、真の男女平等の実現をめざした世界的規模の努力の結果、生まれたものである。我国では、「国連婦人の10年」の最終年である1985年の6月に批准された。また国内でも、1970年代初めより「家庭科の男女共修をすすめる会」が発足し、多面的な運動が繰り広げられていた。世界の流れの一環としても、評価すべきことである。とはいえ、残念ながら現場の教師及び社会全体の中に、「女子差別撤廃条約」の精神や「家庭科の男女共修をすすめる会」の主張が浸透しているとは言い難い。つまり、家庭科男女必修は内からの気運の高まりの結果生まれた、とは言えないのである。この事実を我々家庭科教師は謙虚に認める必要がある。

この様な状態で、家庭科は男女選択ではなく男女必修となった。高校レベルでの家庭科男女必修は世界中でも例がない。それでは、なぜ我国で男女必修となったのか。その理由としては以下の事柄が推測される。第1に、近年我国では家庭及び家族の崩壊という現象が、社会的にも深刻化してきている。これを食い止めるため、家庭科で親となる教育を男女に行うことを期待したこと。第2に、我国の急速な高齢化を踏まえ、男女共に生活的自立を養い、加えて健康教育・生涯教育の一端を担うことを期待したこと。第3に、ブームと言える程の情報教育の中、特にコンピュータの技術指導用の教科として期待したこと。以上3点の期待がかかっているのであろう。但し、これらについての私見は本論Ⅱ章の中で述べるつもりである。

以上の様な流れを考えると、手放しに明るいスタートとは言えない。従って、家庭科教師はこれらの事実を踏まえ、積極的に家庭科を見直し、地道な努力をしなければならないと思う。それなしには、長い目で見た家庭科教育の存続は困難であろう。この様な危惧は、家庭科を専門とする人々のみならず他分野の人々の中にも多く、男女必修実施にむけて様々な研究がなされている。

本稿は特に、今家庭科教師にとって最も大切なことは何かを、本校での新教育課程編成までの実際の過程を通して考察したものである。

Ⅰ．本校での取り組み

本校では、今年度当初より新指導要領への本格的取り組みが行われた。本章では、その中の家庭科における試みを紹介してみたい。

1．教官研修会

本年4月、教育課程委員会と研究部の合同企画にて、新指導要領の説明会が放課後2日間に分けて行われた。教務部主任からの全体像の説明に続き、各教科の代表1名が各々全教官に対

し説明をした。以下に家庭科の内容を示す。

1）はじめに

ここでは、2）以下の説明に先立ち3点の前提事項を述べた。以下に説明内容を示す。

第1に、家庭科は女子のみ必修から男女必修となること。（一家庭科教師として大変喜ばしい、との感想も加えた。）第2に、本説明は標準単位数の指定されている3科目（家庭一般・生活技術・生活一般）のみについて行うこと。第3に、これら3科目間の選択は、本来多様化・個性化に伴い個人選択されるべきであるが、現実的には学校選択と予想されること。

2）家庭科男女必修について（男女必修となった経緯と家庭科に期待されること）

これらの内容は、〝序〟の部分で述べた通りである。重複を避ける意味で、ここでは省略する。

3）現行指導要領と新指導要領の比較（内容の新項目と新3科目の特徴）

この説明は、次ページに記載の「表1．現行指導要領と新指導要領の比較」を基に行った。以下に説明の内容を示す。

表1中に、内容の新項目を実線アンダーラインにて施した。新科目である「生活技術」・「生活一般」に多く見られるのは当然であろう。但し、以下に示す3科目共通の新項目には、家庭科全般の新しい傾向が窺われる。

○高齢者の生活と福祉
○消費生活と消費者としての自覚
○生活情報の活用
○青年期の生き方と結婚
○親の役割

3科目の特徴は、まず目標に示される通り、各々の立場の違いにあらわれる。（表1中の波線アンダーライン参照）次にそれらの内容を比較する。「家庭一般」は、名称も同じである通り、従来の「家庭一般」の流れを最も受けている。現実には、女子校及び女子のみ選択になると推測される。「生活技術」は、中学の「技術」の流れを受け、電気・機械・コンピュータという目新しい内容も多い。男子校及び工業系の学校での選択が推測される。「生活一般」は、内容的にというよりも、その形式に特徴のある科目である。選択の幅が広く、附則2に示される通り、後半2単位分を体育をはじめとする他教科で当分の間代替することが可能とされている。これによって、進学校をはじめとする多くの普通高校、及び男子のみの選択が推測される。

4）小・中学校の家庭科について（現行指導要領と新指導要領の比較）

家庭科の、総合的な変化を示すため、小・中学校の新指導要領についても、簡単に説明した。

小学校では、「住居と家族」という領域が「家族の生活と住居」に変わり、家族生活に対する比重が強められた。

中学校では大きな改訂がなされた。従来の家庭系列・技術系列の枠が消え、男女共に「木材加工」・「電気」・「家庭生活」・「食物」の4領域が必修となった。特に「家庭生活」は従来の家庭系列にもなかった領域であり、俄かに期待がかけられたものと思われる。さらに、選択領域ではあるが「情報基礎」という領域も新設されている。

小・中学校共に、家庭・家族面に重点がおかれたことが窺われる。

〔表１．現行指導要領と新指導要領の比較〕

―――― 新項目

科目	（現　行）家庭一般	共　　通	家　庭　一　般	生　活　技　術	生　活　一　般
目標	衣食住及び保育などに関する基礎的な知識と技術を家庭経営の立場から体験的・総合的に習得させ、家庭生活を合理的に営み、その充実向上を図る能力と実践的態度を育てる。		衣食住、家庭、保育などに関する基礎的な知識と技術を家庭経営の立場から総合的、体験的に習得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と態度を育てる。	衣食住、家族、電気、機械、情報処理などに関する基礎的・基本的な知識と技術を生活を合理的に管理する立場から実践的、体験的に習得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と態度を育てる。	衣食住、保育、家庭経済などに関する基礎的・基本的な知識と技術を家族の健康な生活を管理する立場から重点的、体験的に習得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と態度を育てる。
内容	(1) 家庭生活の設計・家族 ア 家庭の機能と家族関係 イ 生活時間と労力 ウ 家庭の経済 エ 生活設計 (2) 衣生活の設計・被服製作 ア 被服の機能と着装 イ 被服材料の性能と選択 ウ 家族の被服管理 エ 日常着の製作 (3) 食生活の設計・調理 ア 家族の食事と栄養 イ 家族の献立作成 ウ 食品の種類による特質と選択 エ 調理と食卓作法 (4) 住生活の設計・住居の管理 ア 住居の機能と住生活の設計 イ 住居の維持管理 ウ 室内の整理と美化 (5) 母性の健康・浮幼児の保育 ア 母性の健康 イ 乳幼児の保育 (6) ホームプロジェクト・学校家庭クラブ	◦家族と家庭生活 ア 家庭の機能と家族関係 イ 家族の生活と家庭経営 ウ 生活設計 エ 高齢者の生活と福祉 ◦家庭経済と消費 ア 家庭の経済生活 イ 消費生活と消費者としての自覚 ウ 生活情報の活用 ◦ 青年期の生き方と結婚 ◦ 親の役割 ◦ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動	(3) 衣生活の設計と被服製作 ア 被服の機能と着装 イ 被服材料と被服管理 ウ 被服製作 (4) 食生活の設計と調理 ア 家族の食事と栄養 イ 食品の特質と選択 ウ 献立と調理 (5) 住生活の設計と住居の管理 ア 住居の機能と住生活の設計 イ 居住性と住居の管理 (6) 乳幼児の保育と親の役割 ア 青年期の生き方と結婚 イ 母性の健康と生命の誕生 ウ 乳幼児の保育 エ 子供の人間形成と親の役割 { (1) 家族と家庭生活 (2) 家庭経済と消費 (7) ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動	(2) 子供の成長と親の役割 ア 青年期の生き方と結婚 イ 乳幼児の成長と生活 ウ 親の役割と家庭教育 (4) 衣食住の生活管理と技術 ア 衣生活 イ 食生活 ウ 住生活 (5) 家庭生活と情報 ア 情報の収集と選択 イ コンピュータの活用 ウ 家庭生活とコンピュータ (6) 家庭生活と電気・機械 ア 家庭生活における電気・機械 イ 家庭用機器の機能と活用 ウ 家庭用機器の安全と管理 エ 家庭用機器の選び方 (8) 家庭園芸 ア 生活と園芸 イ 野菜及び草花の栽培と利用 ウ 緑化環境の管理 { (1) 家族と家庭生活 (3) 家庭経済と消費 (7) ホームプロジェクトの実践と家庭クラブ活動 ※ 学校においては、内容の(1)から(7)までを履修させるものとする。ただし、特に必要な場合には、内容の(5)又は(6)のいずれかは内容の(8)で替えることができる。	(2) 子供の成長と親の役割 ア 青年期の生き方と結婚 イ 乳幼児の成長と生活 ウ 親の役割と家庭教育 (4) 家族の健康管理 ア 衣生活 イ 食生活 ウ 住生活 ↑（前半） (5) 衣生活と被服製作 ↓（後半） ア 服飾デザイン イ 被服製作 ウ 手芸 (6) 食生活と調理 ア 食事の計画 イ 調理 (7) 住生活と住居の計画 ア 家族周期と住生活 イ 住居の設計 ウ インテリアデザイン (8) 乳幼児の保育 ア 母性の健康と生命の誕生 イ 乳幼児の発達と心理 ウ 乳幼児の生活と遊び (9) 家庭生活と情報 ア 情報収集と選択 イ コンピュータの活用 ウ 家庭生活とコンピュータ { (1) 家族と家庭生活 (3) 家族経済と消費 (10) ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動 ※ 内容の(5)から(9)までについては，それらのうちから２又は３を選択して履修させるものとする。 ※ 附則 2 参照。

5）新指導要領への取り組み（新しい家庭科のあり方）

1）～4）の説明を踏まえ、ここでは本校における新しい家庭科のあり方を、希望と同時に提示した。

①授業形態の希望

最も重要な事として、男女別学・共学問題がある。男女必修とはいえ、男女共修とは示されていないからである。しかし、現実の家庭生活・社会生活は男女で営まれており、男女別学での家庭科は不自然かつ無意味である。よって男女共修を強く希望したい。

②科目選択及び履修単位数についての見解

可能であるならば「家庭一般」をと考えるが、本校の性質上「生活一般」選択も已むを得ないであろう。それによって、普通授業では前半2単位のみ履修とし、後半2単位は「体育」または、夏休み中の体験学習等の集中講義で代替となることも考えられる。

③家庭科のめざすもの

今回は、新指導要領に基づいて説明をしたが、指導要領はあくまで1つの指針ととらえている。コンピュータの技術指導等、納得できない部分もあるからである。本質的に家庭科は、〝ごく普通の人間〟を育てることをめざしたいと考える。

以上が説明の大筋である。本来は教育課程編成上の事務的説明のみを求められていたのだが、これを機会に家庭科の内面の説明もおりこんだつもりである。

尚、研修会後の他教官の疑問点及び意見を、集約して以下に示す。

①男らしさ・女らしさの喪失への危惧。

②女子の技能低下に対する危惧。

③生き方教育の必要性への疑問。

これらは、説明が一方的であったことや説明者の力量不足から生じたものと思われる。次にこれらについての私見を述べたい。

①に関して、男らしさ・女らしさは全く否定しない。但し、男＝外・女＝内に代表される枠組みをはめた意味ではとらえていない。真の男らしさ・女らしさは、男女が共に学ぶ中で発揮され、見い出されるものと考える。

②に関して、従来より家庭科を単なる技能教育とはとらえていない。確に我国における家庭科は、戦後の教育改革によって、戦前の「家事」「裁縫」を再編成した形で出発した。それ故、技能教育の印象が根強いことは否定できない。しかし同時に、当事の教育目標が「民主的な家庭建設」であったことを、今一度思い起こすべきであろう。

③に関して、生き方教育はやはり必要だと思う。但し、1つの価値観を押しつける危険性を伴うことも事実である。その点を充分念頭におき、〝教える〟のではなく、生き方を多面的に見させ、〝見直そう〟・〝考えよう〟とする姿勢を培いたいと考える。

以上の他に、解釈上のことでもう1点触れておきたい。「生活一般」選択と仮定し、前半2単位を男女共修とする。その時点で、男女共修は実現したと考え、その上で女子のみ後半2単位を履修するという形式である。これは、1つの解釈として可能であろう。しかし、男女平等の理念からはじまった新しい家庭科が、履修形式に男女差をつけるという矛盾は避けたい。よって例え2単位となっても、男女共修という形式のみで貫きたいと思う。

研修会によって、決して男女共修家庭科に対する理解が得られたとは思われない。しかし、本会を第1歩として、結果的に男女共修にて「家庭一般」4単位が承認されたのである。その後の経過について後述してゆきたい。

2．生徒の実態調査

本年５月、本校１・２年生の男女を対象にアンケートを実施した。内容は、生徒の生活全般や学習に対する願望を主としてある。目的は、家庭科の授業にその願望を反映させるためであるが、同時に教師側の一方的見解を改善するという意味も含む。さらに、最後の質問文中に家庭科男女必修となることを述べ、その事実を男子にも認識させることも意図してある。以下に質問項目及び結果・考察を示す。

質問１．時間があればやりたいと思うことを書いて下さい。

（結果）

（１年男子）	（１年女子）	（２年男子）	（２年女子）
１位　睡　眠 30票	１位　読　書 21票	１位　旅　行 24票	１位　読　書 18票
２位　読　書 12票	２位　睡　眠 15票	２位　睡　眠 22票	２位　旅　行 13票
３位　旅　行 11票	〃　旅　行　〃	３位　読　書 11票	３位　料　理 ７票
〃　音　楽　〃	４位　料　理 ９票	４位　スポーツ ７票	４位　スポーツ ６票
５位　コンピュータ パソコン等 ９票	〃　遊　ぶ　〃	５位　遊　ぶ ６票	５位　睡　眠 ５票
６位　遊　ぶ ７票	５位　喋　る ７票	６位　映画鑑賞 ３票	６位　遊　ぶ ４票
〃　スポーツ　〃	６位　花嫁修業（習い事） ４票	７位　料　理 ２票	７位　映画鑑賞 ３票
８位　勉　強 ６票	〃　ショッピング　〃	〃　テレビ　〃	８位　語　学 ２票
〃　ボーッとする　〃	〃　スポーツ　〃	〃　音　楽　〃	〃　部　活　〃
〃　趣　味　〃	〃　映画鑑賞　〃	〃　ゲーム　〃	〃　音　楽　〃

（考察）

この質問は、それ自身の意味と共に、家庭科という教科を意識することなくアンケートに取り組んでもらうためはじめに置いたものである。

学年差・性別差を問わず、睡眠・読書・旅行が上位を占めており、その他遊ぶ・スポーツも10位内に入っている。ほぼ予想された結果と思える。

（※質問２～５に関しては、解答の幅が大変広いため、結果そのものは省略し、結果から推測される傾向についての考察のみ示す。）

質問２．個人または集団で学びたいこと。やりたいことがあれば書いて下さい。

（考察）

〝なし〟と答えた者が全体の⅓を占めたことはやや残念であった。解答のあったものからは、３つの傾向が推測される。

①社会的な体験や深い認識力をつけること。

（例．裁判所や各種施設等の見学。経済・歴史・法律等についての、「社会」の授業よりも深い学習。）

②自然の中での体験学習。

（例．サバイバル。古代生活の体験。園芸。）

③最先端技術の修得や専門的学問。

（例．コンピュータ。心理学。英語以外の語学。）

新しい家庭科の中にもり込みたい傾向のものが、かなり具体化されているようだ。

質問３．学校の授業の中に新しい科目ができるとしたら、どの様なものがよいか書いて下さい。

（考察）

質問２で示された解答が、さらに細分化したようであった。ここでは、〝授業〟と限定したことにより加わったと考えられる、新しい意見のみ紹介したい。

①受験に直接関係せず、テストもない授業。

②討論や実習を取り入れた授業。

③自由に研究のできる授業。

④選択授業。

この他、「もうこれ以上増えないで欲しい。」との本音らしい意見も複数みられた。

質問２・３の解答に共通して、受験を目標とする学習は今以上望まれておらず、反対に自由な学び方を希望する声が目立っていた。これらの意見は、新しい家庭科の突破口として大変参考となるものだと思う。同時にこれは、教科を離れた一教師としても、真剣に受けとめるべき問題ではないだろうか。

質問４．家庭科の授業の中で、とり入れて欲しい内容を書きなさい。

（考察）

ここで初めて「家庭科」という名称を出したが、やはりピンとこなかったのか、男子の４割程度が無解答であった。已むを得ないかもしれない。解答のあったものの中では、やはり調理実習が多く、５人に１人の割合であった。その他〝～のし方〟〝～のコツ〟等How toものや、技術関係のものも目立つ。家庭科＝調理実習・技能教育というイメージは、高校生の間にも根強くあると思われる。しかし、中には〝家庭科という教科について〟〝家庭教育と社会現象の関連について〟等に代表される様に、哲学的・学問的内容を期待している意見もあることを加えておきたい。

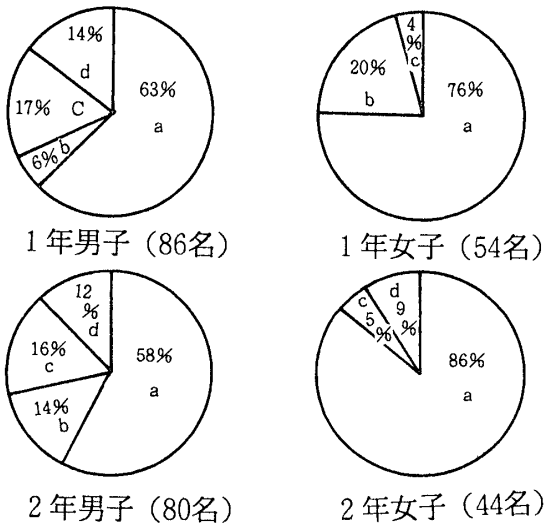
質問５．家庭科は平成６年度より男子も必修になりますが、これについて意見・感想を書いて下さい。

学年別・男女別の家庭科男女必修についての賛否の表・グラフを下に示す。

［表２．家庭科男女必修についての賛否］

（金大附高）

（人）	１年男子	１年女子	２年男子	２年女子	全　体
a賛成	54	41	46	38	179 (68%)
どちらともいえない b	5	11	11	0	27 (10%)
c反対	15	2	13	2	32 (12%)
d無関心無解答	12	0	10	4	26 (10%)
計	86	54	80	44	264 (100%)



【図１　家庭科男女必修についての賛否】

（金大附高）

男女共に過半数が賛成意見を示したこと、及び男子に特に多いと予想した無関心派が1割程度であったことは、大変喜ばしいことである。

以下に理由についての考察を示す。

(考察)

まず、理由には大きく男女差があることをおさえておきたい。

賛成の理由は、男子の1位が、将来の下宿生活や単身赴任時等の〝1人ぐらし〟の際に役立つからというものである。それに対し、女子でその様な理由をあげた者は少ない。圧倒的に多いのが、家庭生活は男女の協力によって成り立つものであり、男子も受けるのは当然。と言い切る意見である。男子の中にも少数その様な理由もあったが、それも時代の流れ、とやや受身的な感じである。男子に1名「女性の結婚相手の条件に、〝家事のできる人〟という意見が増えてきているから。」というものもあった。その他男子の理由には、格技が苦手だから。という消極的なものも目立った。

反対の理由は、男子では「日本男児たるもの家庭科なんかしてたまるか。」の言葉に代表されるように、とにかく男には必要ない。というものが多い。女子では、〝女の城〟がなくなるようで寂しい。男の方が上手に料理を作ったらみじめだから。などと気弱な感じが受けとれる。

質問4に対する解答では、男女共に調理を期待していたが、調理を代表とする家庭生活に対する考え方には、男女の間に大きな開きがあることがわかる。家庭科男女共修となった時、最も問題となるのは、この男女の内にある家庭及び生活に対する根本的姿勢の違いであろう。これについて、意見を交換し合い、考えさせるのが大きな目的の一つとなるであろう。

本稿では全ての意見を書くことは不可能であるが、上述の他非常に多くの意見があった。厳しい言葉の中にも励ましの気持ちがこめられているものなどに触れると、大変喜ばしかった。また、様々な要求があるということは、それだけ家庭科は固定的ではないということであろう。つまり、教師の取り組み如何によって、生徒側の意識や姿勢も大きく変化するのである。家庭科教師として、強い自覚の必要性を感じた。

生徒へのアンケートを通して、予想以上に新しい家庭科のヒントが得られた様に思う。但し明確な数などの結果は示しにくい質問のため、考察にも私観が入ってしまったと思われる。また、女子の意見には、日頃の家庭科の授業内容が大きく反映しているとも思われる。

尚、アンケートの回収率が95%以上もあり、まじめに答えてくれてあった。担任の先生方、及び生徒諸君に感謝したいと思う。

3．他教官との話し合い

家庭科教師は各学校1～2名が普通であり、本校でも1名である。従って教科についての専門的議論は、校内ではされにくい。また、男子生徒との接触も少なく、受験にも直接関与していない。これらが利点となる場合もあるが、多くの場合視野が狭くなり、孤立化してしまう傾向がある。

しかし、本校では研修会をきっかけとして家庭科に関する話題が広がる様になった。家庭科は、特別な専門知識がなくても誰もが語れるという利点がある。従って、小さなきっかけで、多くの教官の意見を聞くことができる。特に隣接教科である、社会科・理科の教官との話し合いからは多くのものを得た。さらに議論を通して少人数からの合意をとる過程で、自分自身の意志も固められるという効果もあった。家庭科男女共修問題では、特に積極的に他教科へ働きかけることが意味あることと思われる。

これらの話し合いの中で、「家庭科とは一体どんな教科なのか。何を中核とし、何を学ばせ

たいのか。」という疑問が出された。この基本的な問いに対し、自信をもって答えることは非常に難しい。なぜなら、家庭科には社会的な面、自然科学的な面、また最も強いイメージとしてある技能教育的な面、そして近年期待されつつある家庭的な面など、様々な側面が考えうる。しかし、それらは全て1つの側面にすぎず、それらを繋ぐ中核が確立されているとは言い難い。では、家庭科には「家庭科とはこんな教科である。」というものはないのであろうか。しかし、それでは生徒に何を学ばせたいのかという目的がない。また、この問いに家庭科教師自ら答えることなしに、他教官を説得することはもちろん、納得のいく授業をすることすらできないはずである。中核を模索する中、他教官より「確立されていない教科であるということは、逆に教師が〝創造〟できるということではないだろうか。」とのアドバイスを受けた。それにより、〝自ら創り出す家庭科〟を意識化することができた。

こうして本校での家庭科は、他教官の力を借りる形で進んだ。しかしそのことが非常に大きな意味をもっていたと思う。

但し、一部の合意のみや、理念だけでも不完全である。次の段階として、全教官にむけて公開授業を行った。

4．公開授業と反省会

「家庭科とはどんな教科か。」この問いに対しての筆者の答えは次章にて詳しく述べたいが、一言で〝生活を重視する教科〟と述べておきたい。家庭科の中核を明らかにさせる為、男女共修が自然かつ必要であることを示す為、本年6月公開授業を試みた。

本校では、研究部の企画の1つとして、学校内の公開授業がある。主に若手教官が授業を公開しそれについて反省会をもつ、というものである。家庭科でも昨年行ったが、再びこの時期に行うことが必要だと思った。なぜなら、授業者の家庭科に対する考えを最も明確に示し、かつ特に家庭科を受けたことのない男性教師に現実に家庭科の授業を受ける経験をもってもらうことが必要だからである。そして、より多くの教師が、家庭科について語ることが大切なのである。それが男女必修の決定した今、最も意味をなすと思われる。但し、1回の授業では無理があるため、3時間で1まとまりのテーマ学習を全て公開授業とした。対象は1年女子全クラスである。授業は「洗剤」というテーマで行った。実験や歴史的背景をもとに、合成洗剤と石けんについてとり扱った。最終的には、洗剤のみに留まらず、身の回りの生活全体に対する1人1人の態度を考えさせるのが目的であった。そして、それには男女の区別などなく、皆で考えることが大切であることも加えた。

尚、次ページより生徒に配布した授業用プリントを示す。

授業後の反省会で出された意見を次に示す。

- ○ 家庭科は〝〜のし方〟だと思っていたが、全く違っていた。
- ○ 受験科目ではない為、生徒がいきいきしている。
- ○ 「生活科」的なイメージであり、男女の区別のない内容であった。
- ○ テーマ学習を単に繰り返すのではなく、トータルとしての家庭科を築く必要がある。
- ○ 注入された能力を、〝生活〟というものを軸に創造してゆく能力に移していける教科である。

等、数々の意見が出され、最終的には学校全体の問題として、〝どんな生徒を育てたいか。〟についての議論にまでふくれ上がった。授業者以上に鋭く家庭科について考えて頂き、恐縮する程であった。多忙の中、3時間も参観して頂き、反省会でも真剣に意見を述べて下さった先生方に、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

テーマ　〝洗剤〟

（生徒用プリントより）

Q.1　なぜ、洗濯するのか？

→汚れを落として、きれいにするため。

（但し、布を痛めないように）

Q.2　汚れには、どのような種類があるか？

- 人体からの汚れ
- 外からの汚れ

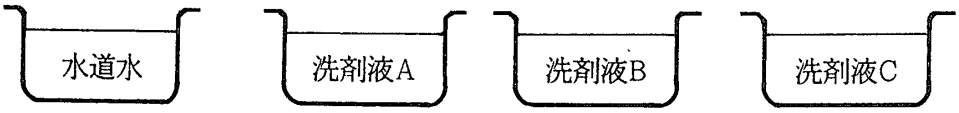
性質
- 水溶性の汚れ
- 油溶性の汚れ
- 固形の汚れ
- 特殊な汚れ（カビ、しみ）

Q.3　なぜ、洗濯に洗剤を使うのか？

→よりきれいにするため。

Q.4　きれいにするために、どんな働きが洗剤にあるのか？

実験1　洗剤の働きを確かめてみよう！



働　　き	水	A	B	C
㋐浸透作用（毛糸を浮かべる）				
㋑乳化作用（油を入れる）←油溶性の汚れ				
㋒分散作用（すすを入れる）←固体の汚れ				
㋓再汚染防止作用（㋒に布をつけ、出す）				

あなたは、どの液で、洗濯しようと思いますか？ 理由は？

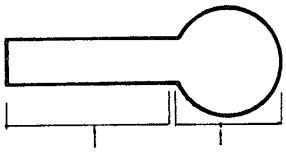
→

○ 洗剤とは…

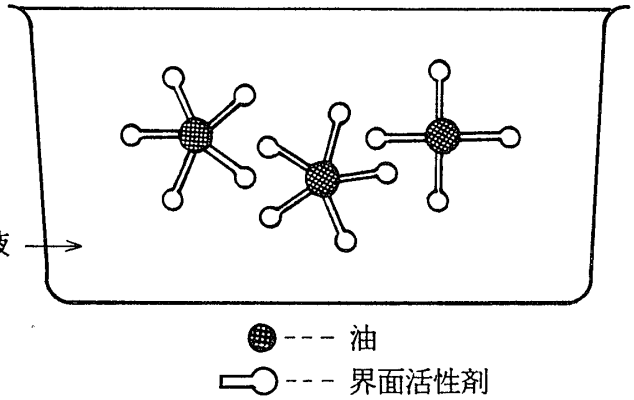
衣類あるいは器物に付着している汚れを除去するために、使用されるもの。（界面活性剤を主成分とし、洗浄効果を高めるために各種の助剤（ビルダー）とその他の添加物を配合したもの。）

洗剤液	A	B	C
	⇓	⇓	⇓
	粉石けん溶液	合成洗剤溶液	米のとぎ汁← 界面活性剤の一種 昔の洗剤である

○ 界面活性剤とは…
　1分子中に水に溶けやすい親水基と水に溶けにくい疎水基（親油基）をもつ油水両親和性物質。親水基及び疎水基の種類も多くその組合せからできる界面活性剤は無数。



<ex 乳化作用>



── 代表的な洗剤 ──

◇石けんと合成洗剤を比較してみよう!!

○ 洗浄力（4つの作用）はどうだろうか。

○ 自宅ではどちらを使っているだろうか。

⇒ほとんど全員　合成洗剤

① "石けん" について

石けんとは … 高級脂肪酸塩の総称。5千年の歴史をもつ。

原　　料 … 牛脂、ヤシ油、パーム油、米ヌカ油、大豆油、硬化油等の天然油脂

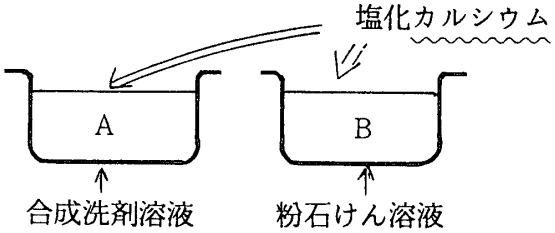
作り方 … №3のプリント参照

性　　質 … Ⓐ水に溶けるとアルカリ性を示す

Ⓑ冷水には溶けにくい。（但しクラフト点以上の温度では急に溶解度が増大する。）

×Ⓒ硬水中で使用すると、Ca^{++}、Mg^{++}と結合して、水に不溶性の金属石けんになる。

↳ 実験2



A、Bの泡立ちのちがい
金属石けん（石けんかす）　} の観察をしてみよう!

Ⓓ生分解性にきわめてすぐれている。

Q. なぜ石けんはあまり使用されていないのか？

◎ 石けんには硬水（CaやMgを多く含む水）に弱いという大きな欠点がある。
　⇒But … 複合石けん、石灰石けん分散剤配合などにより補えないか。
◎ 洗濯用粉石けんを販売しているメーカーが少ない。
　コマーシャルなども聞いたことがない。

これらの主な理由により石けんはあまり使用されていない。
その他、なんとなくきれいにならないという主婦の意見も多い…。
　　くすむ

② "合成洗剤" について

成分 … 石油を化学的に変化させて作った合成界面活性剤が主成分。他に助剤・添加物を含む。（プリントNo.2参照）

歴史 … 第一次世界大戦中にドイツで石灰からつくられたのがはじめ。
日本では、昭和28年より市販開始。電気洗濯機の普及とともに需要が急速にのび、昭和37年石けんの生産量を抜き、年々その生産量は増加している。

昭和43年主成分ABS（界面活性剤の一種）が生物分解性の悪さより、LASに切りかわる。
昭和54年、琵琶湖の富栄養化問題にともない洗剤栄界無リン洗剤発売。（プリントNo.1．2参照）

Q. 無リン洗剤に切りかわったにもかかわらず、なぜ、合成洗剤禁止運動が全国に広がったのか？

①りんを含んでいたトリポリン酸ナトリウム（水質軟化etcの作用）にかわって入れられたゼオライト（アルミノけい酸塩）について
⇓
超微粒子水に溶けない
⇓
排水管下水管のねづまりやヘドロの原因
⇓
環境への影響

②ABSに変わって用いられるようになった界面活性剤LASについて
生物への影響（魚の死・奇形）
⇓　⇓
環境へ　人体へ

③助剤として含まれている蛍光増白剤について
まぶしい白、あざやかな色にかくされたヒミツ … 見た目のあざやかさにごまかされないで!!
物に移りやすい性質があるということは…
⇓
人体へ影響

実験3　合成洗剤の残留実験　（プリント　No.3参照）

◎ 汚れが落ちれば、見た目が美しくなれば、それでよいのだろうか？
それだけを基準に洗剤を選んでよいのだろうか？

資料

☆洗剤メーカー（A社）への電話より

Q. 粉石けんは発売されているか。
A. 今年の春で生産をうちきった。
Q. それはなぜか。
A. 石けんは硬水に弱く、石けんかすなどの残留により消費者からの苦情が多くよせられるため。
Q. 合成洗剤の環境に与える影響はどうか。
A. 日々の研究により、環境に対して悪影響をおよぼすことがないような原料が開発されているので安心してもらいたい。
Q. 石けんに比べ合成洗剤は、人体に対して安全性が低いのではないか。
A. 確かに、石けんは天然の油を原料としているが、製品となるまでに石油を原料とする多くの物が添加されているため、結果的には石けん、合成洗剤の安全性に違いはありません。

さて、あなたはA社の説明をどううけとめますか？
我々消費者も〝与えられるだけ〟でよいのでしょうか？

実験4　石けん・合成洗剤の安全性を比べてみよう！

皿に脱脂綿を置き、各々水、粉石けん（表示使用濃度）、合成洗剤（表示使用濃度）をヒタヒタになるまで入れる。
うぐいす菜の種子を10粒ずつおき、発芽・生育状態を観察する。

たねまき … 6月8日　　観察日 … 随時

	水	石けん水	合成洗剤溶液
発芽			
生・育			

安全性にちがいはないと考えられるでしょうか？
→

○身のまわりの合成洗剤を探してみよう！

○ VTR「くらしの中の不安 ― 合成洗剤」を見てみよう！

感想

― おわりに ―

「洗剤」というテーマ学習はいかがでしたか。

はじめ「洗剤」というテーマをきいたとき、皆、どんな内容を想像したでしょう。

各メーカーの合成洗剤の比較、洗濯温度の比較、上手な洗濯の仕方etcきっとこんなことを思い浮かべたでしょう。私自身、はじめはそんなものだと思っていました。そして、洗剤＝合成洗剤だとも思っていたのです。ところが自分で学習する中で、そんはHow to～ではない、もっと大切なことが沢山問題点として浮かび上がってきたのです。人体への害、環境への害 … 人類にとって、とっても大切なことが、洗剤を通してみえてきたのです。

～私が、このテーマ学習を通してあなたたちに伝えたいこと～

あなたたちにとっては、きっと、合成洗剤の〝悪〟をうったえた授業のように感じたかもしれません。でも、私にとって、これは１つの例にすぎません。もちろん、合成洗剤の害を色々知ってもらうこと。そして、実験やデータを通して科学的な目で、かつ、歴史の流れを追って社会的な目で、自分の方法を選択してもらうこと。それらのこともとっても伝えたく、身につけてもらいたかったことです。でも、本当に考えてもらいたかったことは何だと思いますか?! 少し考えてみて下さい。合成洗剤を世の中から追放すれば、全て解決することでしょうか？ 科学的・社会的な目は、他の授業でもっともっとつけているはず。

―人ははじめ、何もなかった。生きることが全てだった。―

そして自分の生活を少しでもよくしようとして、数々の学問や技術・制度をうみだしました。ところが今、それは逆転してしまった様です。科学の進歩や技術制度の発展が、生活をよりよくしたいと願って作り出されたものが、いつの間にか、人間のそして地球の破滅へと進めていっている様な気がするのです。

１度、立ち止まって、〝生活〟についてゆっくり考えてみませんか。〝生きる〟ということを見直してみませんか。全ての基である〝生活〟というものは〝低レベルなこと〟ではないはずです。

そして、生活に関することは１人でしても全く意味がないことです。つまり１人の天才の出現より、多くの人々の少しの向上の方が価値あることなのです。「１人の100歩より100人の１歩」これは、家庭科の原点かもしれません。さらに、「女子のみの２歩より男女の１歩。」これが、男女共修の第１の意義だと思っています。

5．家庭科の扱いについて

1学期を通して試みたいくつかのとり組みを通して、家庭科という教科が若干、校内において理解を得られた様に思う。結果的に、現段階では新教育課程において前述の通り、家庭科は男女共修にて「家庭一般」4単位履修という形となった。但しこれには、実験校である附属学校として、「生活一般」を選択し、代替科目を認めることはすべきではない。などの意見も反映されていることも付け加えておかねばならない。とはいえ、当初考えてもみなかった理想的な形で家庭科をさせてもらえることには、深く感激している。その期待をうらぎることのないよう、益々の努力を重ねていかなければならないと思う。

Ⅱ．家庭科教師の課題

1．家庭科とはどんな教科か

Ⅰ章で示したとり組みを通して、まず家庭科教師自身が〝家庭科とは何か〟という問いを自分の中にもつことが大切である。

私見ではあるが、家庭科とは生活・生きることを中核とし、生きる為・生活する為にすべては始まったということを呼び起こす教科だと考える。学問の始めは1つであった。ところが今、学問は細分化・専門化し、本来の起源である、生きる為・よりよい生活の為という中核を見失ってしまっている。その為、学問の発達が人間の生活を苦しめ、破壊している。社会についても同じことがいえる。よりよい生活の為の社会・公が逆に個人生活を脅かしている。今、前進以上に自分の回りの生活を見つめ直す必要があるのではないだろうか。そして〝生きる〟ということを真剣に考えてはどうだろうか。そんな問いかけをし続けることが、今最も家庭科に必要だと考える。

その為の手段として、社会学的知識と自然科学的視野も用いたい。但しこれは、家庭科が社会科と理科の中間の様な曖昧な存在と言われる原因となりやすい。実際、家政学的に関して言えばアメリカ型家政学であるHome Economicsとヨーロッパ型家政学であるDomestic Scienceが相当している。しかし、それをどちらを選ぶかというレベルで考えようとは思わない。あくまで生活・生きることが主であり、その解明に両方の分野を用いるにすぎない。これを、Ⅰ章4で示した公開授業の内容にあてはめ、具体化してみよう。まず、洗剤の働きや成分を知る為、自然科学を応用した。その上で科学的に洗剤の歴史などをみた。しかし、本テーマで真に追求したのは、どちらでもなく、両者をふまえた上で〝どう生活をみるか、どう生きるか〟という問いである。又、それを強制してしまうことは道徳となる為注意したい。つまり、中心はしっかりとすえてあるのである。従って、今後は人文科学等の分野へも伸びるものと考えられる。決して中途半端なものでないことは押さえておきたい。

以上が、私の家庭科に対する考えである。さらに〝序〟でふれた、必修となった要因についての私見を述べたい。第1点目、親となることは大変尊いことだと思う。しかし、家庭が崩壊しつつあるから、学校教育でその役目を果たそうという考えは納得がいかない。却ってとりあげつつある家庭の機能を戻すことが本筋ではないだろうか。又、親となる教育を学校で一斉にされることの恐しさにも気付くべきであろう。第2点目、生活的自立であるが、これについては賛同できる。但し、技術指導のみに陥ることのない様注意したい。第3点目、情報教育であるが、アンケートにも示されたようにコンピューター等に対する生徒の学習意欲は高い。しかし、これが家庭科の調理・裁縫に次ぐ技能訓練となることは明らかである。決してその使命をおう必要はないと思う。但し、情報教育としては、「いかにコンピューターが我々の生活に関

り、人間性を喪失させているか。」については行う必要があるかもしれない。

2．家庭科教師の姿勢

Ⅱ章1では家庭科に対する考えを述べた。しかし、これはあくまで筆者の「家庭科」である。つまり、最も大切なことは、自分自身にとっての「家庭科」を模索し創造することであろう。各々の教師が各々の信念を持って創り出せばよいのである。そしてその過程の中で悩み苦しむことが実は大きな意味を持つのではないだろうか。それには、書物を参考としたり、他教科教官をまじえての議論を重ねることも必要であろう。しかし最終的には〝自分で創り出す〟という姿勢を忘れてはならないと思う。さらに、その考えについては、修正もありうるだろう。つまり、常に「家庭科とは何か。」という問は、繰り返されていなくてはならないと考える。

ちなみに、6月後半の2週間、本校には5人の教育実習生がきた。前もって2週間は各々自分なりの家庭科観を最大限に表すことを告げ、内容については全く自由とした。実習生にとってもこれが最も大切な課題だと考えたからである。結果、5人が5人各々に悩みながらも精一杯の授業を展開していった。住まうということから人格を考えた者、逆視点を用い自然について語った者、家族にとって何が大切かを血縁に焦点をおき考察したもの等各々にすばらしいものであった。生徒も実習生の創り出した家庭科に大変魅かれていた。つくづく創造された家庭科のおもしろさを感じるものであった。

これらの一連のとり組みは、新指導要領を契機として初まった。しかし、結果として指導要領から得たものは、男女必修という形式だけである。つまり、最終的には自分の授業をするものと考える。その点で科目選択については、こだわる必要性を感じていない。

お わ り に

本稿では、家庭科男女必修にむけて、何が家庭科教師にとって最も大切なことかを考察してみた。教官研修会での説明に始まり、生徒へのアンケートや他教科の教師との議論を通し、公開授業も行った。それらを通して「家庭科とは何か」という問い、とそれを考え答えることの重要さを認識した。そして自分なりの家庭科を創造することこそが、何よりも大切なことであるという結果を得た。さらにその際、校内の他教官の協力を得ることも大変大きな力となる、と思われる。

しかし、今後の課題として、創造した家庭科の教材を体系化して全体として家庭科のねらいへ導くという課題が残されている。さらに、本稿で示した取り組みは学校内のみで留まっている。誰もが語れる家庭科を、学校という枠でくくってしまわず、生徒の家庭へ、地域社会へどんどん広げてゆく必要がある。これらの営みについては、本稿では全くふれておらず早急に今後の課題としてゆかねばならない。また、同時に、現実に男女共修という形で1度でも授業を行ってみることが望ましい。

今後へ多くの課題を残すことになったが、以上で本稿を終わらせたいと思う。

未熟者ながら、本稿は家庭科教師にとって大変厳しい見方を多くしてある。これらについては、自分自身を戒める思いが強いことと解釈して頂きたい。

最後に、他教科ながら親身に「家庭科」についての相談にのって下さった本校の教官方や、金沢大学の豊村洋子先生に深く感謝致します。

〝男女の1歩〟にむけて、家庭科が発展してゆくよう努めたいと思います。

＜参献文献＞

1）清野きみ・豊村洋子共編　『家庭科教育』
2）吉野正治　『生活様式の理論』
3）宮崎礼子・苦山浩司・伊藤セツ編　『家政学理論』
4）道喜美代・渡辺ミチ編　『家政学』
5）『家庭科教育　4』1989年4月号
6）『家庭科研究』1989年4月号
7）『新しい家庭科　we』1986年10月号
8）『　　〃　　』1986年11月号
9）『　　〃　　』1988年2・3月号
10）『　　〃　　』1989年 夏増刊号
11）『　　〃　　』1989年4月号